

「日頃の教育に対する工夫、及び今後の教育への抱負」

物質・生命化学科 米沢 晋

シラバスに合わせて半期を通してのストーリーとなるよう教材を用意し、毎回個々に内容を確認しながら予習・リハーサル、講義に際しては視聴覚教材をふんだんに取り入れつつ聴講者の表情を注意深く観察して理解が十分記入時間進むように進度や表現を微調整、講義終了時には適切な量のホームワーク課題を出しつつ理解度を確認するためのチェックペーパーを実施、終了後速やかに講義を振り返り次回の講義内容を再考する一方で、欠席者へのフォローを実施・・・という理想的な講義とは大概かけ離れた、ゆる〜い講義をしていました。ですので、「工夫」「抱負」というよりも、「反省」を込めて、現状および考えていることを以下にお示ししたいと思います。

1. 視聴覚機器の利用の最小化・・・「書く」「聞く」「考える」を基本に

実は私は視聴覚教材を講義にはあまり利用していません。スライドを投影しながら話を進めることは非常に合理的ですし、スマートなのですが、反面、私自身の経験から自信を持って言いますが、「眠くなりがち」です。ですので、動画でたまに話題作りをすることはもちろんありますが、基本的には視聴覚機器の使用は最小限度にとどめるようにしています。対して、「書く」ことと「聞く」ことをバランスよく行い、並行して「考える」ことができるように、時間を配分することが重要だと思っています。米沢の講義については過去にも現在にも程度の差こそあれ「板書からノートを起こしにくい。」という感想、意見が出ることもあり（字が乱雑だという話です・・・）、キーワード記入式の授業用に特化したプリントを常に用意し、講義とともに記入が終了すると、それがいわゆる講義ノートになるように配慮してみています。これにより、ノートをとることに必死で話が「聞けない」という事態を招かないように、また、「書く」合間に関連する雑談等を入れて時間の隙間を作り、「考える」余裕を作りだすよう努力をしています。難点は、雑談が豪快に脱線しがちで、時には復旧不能になることでしょうか。まあ、それは私のパーソナリティとして学生達にはあきらめてもらっています。

2. リアルタイムコミュニケーション

人間が講義をして人間が聞く以上は、コミュニケーションを密にとることが重要なのは言うまでもないと思っています。例えば、「授業内容を理解できたか？」という質問においては、同じ内容に対する質問でも試験が近づくにつれて「よく理解できた」から「理解できていない」に変化する傾向があります。綿密に指導するためにはこの中から本当に理解できていないものと単に不安に駆られているものとを区別して対処する必要がありますが、こうした微妙な「空気」の把握は簡単ではありません。地道なリアルタイムのコミュニケーションが一番かなと思ひ、そのための手段のひとつとして、通称“出席の紙”という、

A6サイズのメモ的に自由記述ができる用紙を配り、授業の感想等を書いてもらうようにしています。定型にならないように、場合によってはお題を提供して大喜利をするくらいの気楽さでいろいろな記述を促しています。こうしておくことで、個人あるいはクラスの単なる学習到達状況だけでなく身体的、精神的健康に関する状況も少なからず把握できるもので、もちろん完全ではありませんが、より「正直」なコミュニケーションがとれるように感じています。

今回こうして振り返ってみて、実のところものすごくレトロなスタイルで講義をしていることが明らかになってしまいました。ちゃんと反省して、理想の講義に少しでも近づけられるよう、今後も努力を続けて行きたいと思います。